

平井和子著(岩波書店、2023年)

占領下の女性たち 日本と満洲の性暴力・性売買・「親密な交際」

山本 めゆ*

くるみざわしん作・演出の一人芝居「あの少女の隣に」は、敗戦直後に占領軍兵士を対象として設立された「特殊慰安施設」を題材としている。主人公の男性は、上司や進駐軍の命により「慰安」施設で働く女性を徴募し、説得する。暴力的かつ矛盾に満ちた指示は主人公を責め苛め、同時に追い詰められた主人公は女性を蔑む。こうした抑圧移譲と女性の身体の管理とが交差する場として、「慰安」施設は描かれている。くるみざわは『胡桃澤盛日記』(「胡桃澤盛日記」刊行会編 2011)を遺した長野県下伊那郡河野村の元村長、胡桃澤盛の孫にあたる。満蒙開拓の歴史を背負った劇作家が占領下での「慰安」施設に光を当てたのも、長年この「慰安」施設を研究してきた平井和子が満洲に引き寄せられたのも、けっして偶然ではないだろう。

平井は前作『日本占領とジェンダー』(2014)において、被占領下で日米の「合作」により開設された「慰安」施設や、女性たちへの「狩り込み」、強制的性病検診といった暴力の実態について論じた。これに対し今作では、日本政府がそれを導入するのとはほぼ同時期に、満洲の地でも男性リーダーたちが同じ発想で同じ方法を選択していたことが強調される。一貫して描かれるのは、戦時性暴力のなかでも性売買の場に身を置いた人(芸妓、娼妓、酌婦、「慰安婦」、「パンパン」等)に対する暴力であり、日本政府や指導者の差配による女性の供出である。

本書の構成

序章「女性たちの体験からとらえる敗戦・被占領」では、敗戦直後から1950年代までの日本本土と満洲をジェンダーとセクシュアリティの視点で見通す(10頁)という本書のねらいが示される。第1章「国家による『性接待』——『良き占領』の

ためのジェンダー・ポリティクス」では、敗戦国政府と警察と業者がいかに連携して占領軍の「接待」を準備したのかが論じられる。主に描かれるのは、特殊慰安施設協会と国に先駆けて施設を設置した神奈川県である。連合国軍の若い兵士たちは占領地において性が供給されるという経験により、征服者としての特権意識や女性をモノ扱いする態度を獲得した。第2章「守るべき女性、差し出されるべき女性——『満洲引揚げ』と性売買女性たち」では、満洲や植民地朝鮮で終戦を迎えた人びとの経験が主題となる。治安維持を目的として黒川開拓団が団の娘をソ連軍将校に供出したことは、近年たびたび報じられるようになった。しかし「一般婦女子」の身代わりとなった性売買経験者の足跡や、新京に設けられたソ連軍「慰安所」などはほとんど検討されていない。また、こうした女性たちはみずから犠牲になってくれたと証言されることもあるが、それが神話である可能性も示唆される。第3章「集団自決とジェンダー——開拓団少女の『引揚げ』体験」では、満蒙開拓団に参加したひとりの女性のライフ・ヒストリーを通じて、引揚げという経験をセクシュアリティの視点から描く。国民学校6年生で敗戦を経験したこの女性の団では、元「慰安婦」をソ連兵に差し出し難局を逃れたという。第4章「『働く女』が支える街——熱海の住民と『パンパン』たち」では、定型化された認識枠組みだけでは見落とされがちな「パンパン」の女性たちのエイジェンシーが浮き彫りにされる。PTAによって1956年に編まれた『母親文集』には、PTAの母親たちと多様な職業を持つ女性たちのあいだに生じた連帯の萌芽も見られる。第5章「少年の目に映る『ハニーさん』——朝霞に生きた『パンパン』たち」では、舞台を埼玉県朝霞市にあった米軍基地に移し、1941年生まれで朝鮮戦争期を「貸席」屋の子どもとして

* 立命館大学文学部

過ぎた人物へのインタビューを通じ、彼の目に映った「パンパンのおねえさん」がいきいきと描かれる。第6章「被占領と復員兵——敗戦を思い知らされる男たち」では、敗戦と被占領という出来事を復員兵たちがどう受けとめたのかがジェンダーの視点で考察される。終章「危機に際して女性を差し出す国に生きて」は、内地と満洲、国家と民間人男性、戦中から敗戦、被占領、そして現代に至るまでのさまざまな連続性を浮かび上がらせる。このように、前作に比べて本作では、ジェンダー化された構造的暴力の下で発揮される女性たちのエイジェンシーとその奪われた声を掬い上げることで、定型化された物語を乗り越えることに力点が置かれている。

「守るべき女性」「差し出される女性」をめぐる

最後に、評者も調査を行ってきた満蒙開拓団と性暴力との関連に絞り、本書の意義をあらためて確認したい。

第一に、黒川開拓団は団の娘だけでなく元「慰安婦」の女性を頼った時期があったが、記者や研究者までもがそれに踏み込まずにきたこと、すなわち報道や学術研究における女性の二分法を本書は明らかにしている。これは評者も思わず息を呑むほど正鵠を射た批判だった。大多数の団が性の供出という過去から目を逸してきたのに対し、黒川遺族会が「乙女の碑」を建立して女性たちに向き合ってきたのは特筆すべきことであり、平井もこの点には最大限の敬意を払っている。問われるべきは「乙女」の被害ばかりに関心を払ってきた聞き手のバイアスのほうだろう（山本 2023）。第二に、本書が「接待か死か」という二者択一を相対化した点も挙げておきたい。黒川開拓団の幹部はソ連軍の協力が得られなければ全員で自決をするより他ないとして、娘たちに「接待」を強いた。し

かし本書第2章では、団長を説得して集団自決を回避した例や、朝鮮半島の事例ではあるが女性の供出を拒否した例が示される。敗戦直後の開拓団は女・子ども・高齢者ばかりだったと強調されるが、意思決定の場を占めているのは常に男性たちである。平井の議論を経由することで、「接待」という選択が不可避だったとしたらなぜなのか、あらためて問うことが可能になるだろう。

最後に、先述の「自発性神話」に関連して評者の問いを述べておきたい。黒川開拓団から差し出された女性たちは同窓会的な集まりを通じて詩を作っていたが、そこには「みずからの命と引き替えに(…)捧げて守る開拓団」とソ連兵への「接待」が自発的なものであったかのように綴られ、「自発性神話」の反転ともいべき現象が起こっている（この詩は「乙女の碑」の碑文にも刻まれている）。毀損された自画像の修復と尊厳回復への道のりのなかで、こうした英霊化の誘惑は抗いがたいものだとしたら、われわれはそれをいかに受けとめるべきなのか。女性のエイジェンシーを重視する立場からも重要な課題となるはずだ。

これらの問いも含め、平井の労作は戦時性暴力を研究・報道する者たちにとって、常に参照点となっていこう。女性の二分法は根強く、学術研究、報道、市民運動にも深く根を下ろしている。本書の問題提起によってさらに議論が活性化することを期待したい。

参考文献

- 「胡桃澤盛日記」刊行会編, 2011, 『胡桃澤盛日記』『胡桃澤盛日記』刊行会。
 平井和子, 2014, 『日本占領とジェンダー——米軍・売買春と日本女性たち』有志舎。
 山本めゆ, 2023, 「引揚げの記憶／報道／研究における『娼婦』の他者化——黒川開拓団・遺族会の経験を通じて」『日本史研究』vol. 734: 18-35頁。